

点軌道が双曲線の場合に、離心率変化の興味によって、過去・未来軌道が計算されることが多い。したがってこのような資料による過去軌道は平均の惑星作用による平均のエネルギー変化よりも大きくなるので、未来軌道についてのものを理論値と比較すべきであると注意した。すなわち軌道への選択効果であると考えられる。このような注意を忘れないことにして、とにかく実在の彗星について、全エネルギーの得失を見るため、セカナナのカタログの資料により、70 彗星について  $d(1/a)_i$  の平均値を作ってみると、その平均値は 0 にはならず、

$$+0.000152 \pm 0.000607$$

となる。Lyttleton・Hammersley が 1963 年に 18 彗星より得た値は第 2 表からわかるように +0.000233 であり、上の値に近い、これが選択効果であろう。

以上長々と検討したことは、要するに長周期彗星が遠方から太陽に近づく時惑星系から受ける加速度は、 $d(1/a)$  に対し、平均 0.0004~5 である。近日点通過後の減速による  $d(1/a)$  の値は、加速度の場合の逆符号のものになるはずであるが、実在の彗星についての計算結果では、全エネルギー変動には選択効果があって、 $d(1/a)_i$  には +0.0002 の余剰が見られ、平均的周期短縮は大きすぎる結論を導きやすいということなるであろう。

以上長々と内容の乏しい話を書きつづけ、しかも自分の興味を持つ方面のことだけしか書かなかったことをおわびする。わが国で、彗星の発見にとどまらず、彗星の研究、特に彗星物理についての観測と研究が発展することをのぞんでやまい。

第 3 表  $d(1/a)$  の値

No.	$d(1/a)$	方法	著者	備考
1	+0.000449	理論	Fabry (1894)	
2	+0.000459	統計	Fayet (1910), Dirkis (1956)	145 近似軌道
3	+0.000552	"	Sinding (1948)	21 精密過去軌道
4	+0.000544	理論	Sinding (1948)	
5	+0.000633	"	Sinding (1948), Dirikis (1956)	
6	+0.000602	統計	Dirikis (1956)	26 精密過去軌道
7	+0.000435	理論	Bilo, van de Hulst (1960)	
8	+0.000438 ~ 449	"	" " ( " )	
9	+0.000630	統計	Lyttleton, Hammersley (1963)	39 精密過去軌道
10	+0.000455	"	" " ( " )	21 精密未来軌道
11	+0.000532	"	Sekanina (1966)**)	81 精密過去軌道
12	+0.000396	"	" ( " )**)	70 精密未来軌道
13	+0.000469	"	" ( " )**)	151 過去・未来軌道
14	+0.000418	**)	Everhart (1968)	900 仮想軌道

\*) 計算実験    \*\*) 第 1 図, 第 2 表等の値

## 学会だより

秋季年會にあたりお願い——参加費について——

5月14日の理事会において、本年度の秋季年會は、10月下旬京都にて開かれることに決まり、京都支部では早速会場の選定その他の準備にかかりました。まず京都大学内に会場を探すことに力をつくしましたが、100名以上の収容力をもつ講義室を3~4日借用することは遂にできませんでした。そこでやむなく学外に会場を求めることになり、使用料の安価な公共的諸機関と多数交渉した結果、やっと「京都府立文化芸術会館」を探しあてることができました。この会館は京都府の経営するところ

で、他の公共機関にくらべても使用料は割安となっておりますが、それでも（拡声装置、映写装置等の使用料を含め）使用料は4日間で9万円足らずになります。本年度の本会の経理状態はかなり苦しく、定會費として秋の本会の会場費にあてられる金額は約5万円程度であります。このような事態になりましたのは会計係の予算編成の不利にもよることで、誠に申し訳ない次第ですが、窮地をのりきるため、本年度の秋の年會では出席者の方に参加費(registration fee)として300円(学生150円)を負担して頂けたら誠に有難いと存じます。本会の経理事情を御賢察の上、よろしく御協力下さいませよう、理事会の諒承を得てお願い申し上げます。次第であります。

会計係